



異界兵装
タシユンケ・ウイトコ

樺薫

Illustration
筑波マサヒロ



KODANSHA
BOX
POWERS
BOX

目次

第1章 ウイトコ、大地に立つ | 7

第2章 戦闘 Beauty×Battle | 35

〔幕間〕 黒檀の瞳の少年 | 53

第3章 ウイトコとマスター | 63

〔幕間〕 鉄腕 Nanami | 83

第4章 胸がでかけりや偉いのか!?! | 97

第5章 絶対知の死人 | 119

第6章 決戦、第3号館前 | 139

あとがき | 182

第1章

ウイトコ、大地に立つ



——駒^{こま}とめて袖^{そで}うちらはらふかげもなし

季節は冬の入り口だった。それは眠りにつくにはあるいは相応^{ふさわ}しい季節なのかもしれない。季節。そんなものを気にし始めたのは、いったいいつからだだっただろう。

いつからだだっただろう、なんて、そんな修辭疑問を弄^{もよぼ}ぶのはきつと潔くはないことだ。僕が季節の中に放り込まれたのは、君と出会ってから。

君の事を知ってしまったから、ただ僕の前をのっぺりと流れ去っていた時間が、急にくっきりとした相貌を帯び始めた。

春、黄色い空を、桜色の花卉が流れる。

夏、陽炎と蟬の声に空気が揺れる。

秋、銀杏^{ぎんなん}と落ち葉がコンクリートを埋め尽くし。

そして、冬。

四回目の、冬だった。君と出会ってから、四回目。僕が季節を数えだしてから四回目。

グランプリレースを翌週に控え、馬券党の教職員

たちが競馬新聞と首っ引きだった、年末のキャンパス。

初雪の降る季節では、まだなかった。

なかったけれど、へたり込んだ君に降りかかる火の粉がまるで初雪みたいで、綺麗だった。

君は火の粉を払うのも忘れて、ただ、僕を見ていた。季節が三回と四分の三巡るその間に、僕は君からそんな視線を向けられたことは一度だっただけでありはしなかった。

君が、惚^ぼけたように僕を見つめる。

その時を、どれだけ僕は待ち望み、そしてそれが訪れはしないだろうという諦念に苦しめられていたことだろう。

望みどおり、君は僕を見つめている。

恐れたとおり、君の視線は、どうしたって優しくはない。

僕は臆病だった。

僕はただ、その気になりさえすればよかったのに、

何かを恐れた。君を失ってしまった今となっては、

僕はあれほどに何を恐れていたのか、もはや思い出すことはできない。

僕は、卑怯だった。

君に気付かせないこと、気付かれていないことを言い訳に、何もしなかった。

何も、何も。

ただ、手遅れになってから、やっと僕は動いた。

動いた僕を見上げる君の瞳に浮かんた恐れの色は、あるいは僕が危惧していたほどには強くはなかったのかもしれない。僕こそ恐れすぎたのではなかったか。

しかし、もう遅い。

もう遅いんだ。

ごう、と壊れた機体が炎を上げる。

異界から呼び出された太刀^{たち}が、槍が、崩れ落ちていく。

動くものの影は、もはやない。

火の粉だけが降り注ぐ真つ赤な冬に、僕は君の視線を感じ続ける。

赤い世界。それが戦火の色なのか、それとも僕の流す血涙の色なのか、はたまた単に地平線近くから差し込んだ太陽光線が、厚い厚い大気層に散らされて、赤い光だけを僕らに届けているのか、それはわからなかった。

——さのわたりの雪の夕暮

*

探してみれば、馬の墓や慰霊碑は、世界中にある。

まずは、馬産地。馬たちの生まれ、そして育つと

ころには、馬の亡骸もまた多く積み重なっていく。

それから競馬場。

そして、駐屯地。

馬は人の古い友人だった。人が人を打ち倒すその戦場には、いつだって馬の姿があり、そして馬の死は、また、そこに積み重ねられていく。

人が馬に乗るのは、人よりも速く走るため。鼠を追うための猫、兎を獲るための犬とは違う、肉を得るための牛や豚とはもつと違う、血塗られた蹄の歴史が、だから馬と人の間にはある。

勝ち馬投票券や金メダルのために走れることは、そう考えるのならば、馬にとっては幸せな生き方なのかもしれない。

走り続けられるのならば。

馬は、走るために生まれた生き物だ。

五百キログラムからの巨大な肉体を、たった四つの蹄で支えるアンバランスな生き物だ。たった四本の大中小手骨が砕ければ、馬は生きていくことができない。

それは、ありふれた事故だった。だから、その乗馬クラブにも慰霊碑が建てられていたわけだ。

だけど、それは彼女には知る由のない——少なくとも身に沁みては思い知られてはいないことだった。

誰しもそうだけれど、実際、自分の身に降りかかってくるまで、事故というのはどこかの不幸な誰かが遭うものだと思っている部分がある。そしてそれは多くの場合決して間違っていない。ただ、その不幸な誰かがよりにもよってこの自分ではないと思うことに何も根拠がないということだけのこと。

彼女は、出遭ってしまった。不幸にも、着地に失敗してしまった。

五百キログラムの体重が一気にかかって砕けたサラブレッドの小手骨は、一般に、回復しない。三本足では、サラブレッドは生きていけない。

美しい馬だった。純白の毛並み。大柄だが、均整の取れた体つき。その馬体から人気がないではない競走馬だったが、成績は振るわず、乗馬に回されて、彼女と出会った。

苦悶に歪んだ顔に布がかけられ、獣医がそと筋

弛緩剤を打つ。

かつて彼女を高々と飛び上がらせた筋肉が力を失っていくのを、彼女は担架の上から見た。

以来、彼女は馬には乗っていない。

*

僕は寝ている。

僕は寝ているのに、あいつらはかまわずやつてくる。寝ている僕の耳元で、あいつらは今日もどうでもいいことをくつつちゃべる。

僕はそれを狸寝入りで聞くともしに聞いている。「なんか、ウチの研究室にもですね、この季節がやってきたわけですよ」

口火を切ったのは、首府大理工学部異界研に所属する学部学生の須葉恵一だった。百八センチにやや満たない長身で、引き締まった体つき。脱色した

髪の毛は今風だが、顔つきにはどこか間の抜けた風情がある。

「どの季節だ」

須葉の思わせぶりな物言いに律儀に付き合っているのは、渋谷秀。同じ研究室の博士課程に所属している。中肉中背。目は大きからず小さからず、鼻は高からず低からず、これといった特徴のない男だが、年相応には落ち着いた物腰だった。五、六年のつきあいになるが、知り合ったところに比べると、少しふつくらしてきたようにも思う。

「新人ですよ、新人」

「ああ。四月だからな」

「なんかもう勘弁してくれって感じですよね。あいつらなんか若くて……」

吐き捨てるように、保坂春樹。かつて異界研に所属していて、去年から別の研究室に移ったはずだが、いまだに渋谷たちとつるんでいる。度の強い眼鏡に、癪の強そうな細面が印象的だ。

「そりゃそうっすよ。だってあいつら二年生っすからね。十代っすからね」

須葉の口ぶりは、新人の若々しさを苦く思う保坂の気持ちに斟酌^{しんしゃく}できているようには聞こえなかった。「……」

だから、保坂は答えようとしなかった。

それで雰囲気が悪くなるでもなかったのは、渋谷がすぐに言葉を引きだからだ。

「確かに新人が来るとちよつと緊張するよな。どんな面白い奴が来るかと楽しみでもあるんだが……」

「渋谷さんてやっぱなんつうか、立派ですよ。僕楽しみとか思わないです。またむくつけき理系のオタク野郎が大挙押しかけてきやがったな……としか」

「あー、保坂さんの研究室男ばっかですもんね。ウチは女の子も多いっすから。なんで保坂さん研究室移ったんすか？」

須葉は、そういうことには積極的だ。それが報われているようにはあまり見えないのだが、とにかく、

「いやだってすっげー可愛いんすよ？　なんかお嬢様って感じで。あれ、なんつうんすか、あんま派手じゃなくて、清楚で……。髪とか真っ黒で。いまだき珍しいホンモノの清纯派ですね。なのに物怖じしないって言うか、でも決してしゃべりじゃなくて……なんかもうマジ可愛かったんすよ！」

「ああ、そういう女に限って遊んでるから大丈夫だ」

「いや、あまり浮かれているようなので、後から真相を知って凹んだら可哀想かなと」

「いやでもホント清楚で可愛いんすよ？」

「とお前が思うことは周りの男がみんな思うってことだ。つまりいろんな男からアプローチを受けているってことであって、それを断り続ける理由はまあ、普通ないわな」

「そっすかねえ」

「お前、もし周りの女の子から『ストイックでかっこいい』ってことで擦り寄ってこられたら、手え出

いつも女のいるほうへ近づいていくようにしている。保坂はそれとは正反対。女性がいるほうには不必要に近づかない。

「女の子がいるかいないかじゃないだろ」

「そっすね。保坂さんさがつす」

「で？　お前は女の子いっぱいウハウハなのか？」

「いやあ、女の子いっぱいだったって二人っすよ。五人来て二人。でもどっちもけっこー可愛いんすよ」

「そうか。よかったな」

「よかったっす。華やかになりますよね……」

「……」

皮肉の通じない須葉に、保坂は呆れている。しかし、須葉は呆れられていると気付くような繊細さは持たない。だから、話を勝手に続ける。

「どっちも可愛いってゆってもまあやっぱ違いますけどね。範子ちゃんてゆうほうがすっげー可愛くて、もう一人はけっこー可愛いって感じで」

「範子ちゃんともう一人かよ」

「さないでいられるか？」

「無理っす。食いまくるっす」

「きっぱりしてるなあ……」

「まあ、だから絶対ビッチだよ。変な夢見んな」

保坂はシニカルにそう言い捨てて、この話題を打ち切った。

僕のいる首府大学理工学部総合システム研究学科異界科学研究室には、須葉の言うとおり、その年、五人の新生者がやってきた。

首府大理工学部は、一年次は教養課程で、二年次から研究室の所属になる。だから、僕はまだ、研究室の新人にお目にかかったことがなかった。

須葉は教養課程のキャンパスで行われた説明会に手伝いで顔を出して、女の子のチェックをしてきたものらしい。

僕は、そういう催しには参加しない。参加したことがない。

で、寝転がっている。寝ていることもあるし、寝たふりをしていることもある。研究室のメンバーたち、保坂のような元メンバーもいるけれど、そういう人たちはそんな僕にかまう素振りをまるで見せない。

その日、異界研の安和将^{あわしょうま}、厩准教授も、僕がいることにまるでかまわず、勤務時間中に競馬中継を見ている。

もうすぐ、本日の第三レースのパドック。厩舎^{きゅうしゃ}では、筋骨隆々のサラブレッドが厩務員に付き添われて出番を待ち構えていることだろう。これから始まるレースに向けて、否応なく緊張感が高まっているのではなからうか。

安和准教授は、このレースの勝ち馬投票券は購入していなかった。理由は簡単。買いに行く時間がなかったからだ。理工系の研究室の、しかも一番若い准教授となれば、自分の研究と学生の指導に加えて、体力の要りそうな学務もどさっと回ってくる。だから、

ら、彼は中々に忙しい身の上なのだ。

それでもレースはチェックしておきたい、前走を自分の目で見ていかどうかで次の馬券を買うときの判断材料は増える——というわけで、彼は周囲の目を盗んで、こっそりと競馬中継を見ているわけだ。どうせ見たって何もわかりはしないのに。少なくとも、プロの評論家や予想屋にわかること以上には。しかし、とにかくパドックは始まる。厩務員に引かれて、馬が一頭ずつ、馬場へと姿を現してくる。がちや、とそこで部屋——異界研の別室——の扉が開く。

「安和先生？」

綺麗な、声だった。

綺麗な声と一口に言っても、声の形容は難しい。高いか低いかで言えば、高いのだろう。太いか細いかで言えば、細い。少しかだけハスキーで、柔らかい響きが、とても上品だった。

「お、おう？」

名前を呼ばれた安和准教授の反応は、あからさまに慌てたものだった。別に今すぐやらねばならないことがあったわけではないにしても、本人の気持ちとしてはやはりサボりだったのだろう。サボっているところを学生に見つかれば、まあ、教師としては慌てるに決まっている。

「すみません。お邪魔でしたでしょうか」
「い、いや、大丈夫。いきなりだったんでね、少し慌てただけ」

「ああ、そういえば私、ノックもしないで……」
「いや、この部屋は研究室のメンバーならいつでも勝手に入っていいんだ。ノックは必要ない」
「そうですか。……？」

ひよい、と彼女は、部屋の中を覗き込む。彼女が僕のいる部屋を覗き込んだとき、僕もまた、はじめ彼女を見た。

確かに、髪は黒かった。そして、長かった。背中の真ん中くらいにまで差し掛かっているだろうか。

瞳も真っ黒で、その真っ黒な瞳はきらきらと輝いていた。卵形の頭にバランスよく目鼻口が配置されていて、その均整はいつまでも眺めていたいくらいに目を奪った。
見たことのない少女だった。でも、それと同時に、どこか懐かしく思える少女でもあった。存在しない心臓をきゅいきゅいと締め付けるような、不思議な胸騒ぎをもたらす、美しい少女だった。

「さあ、第三レースのパドックが始まりました。馬番一番は……」

安和准教授の携帯電話から、競馬中継の音が流れる。慌てていた安和准教授は、ワンセグ機能のスイッチを切ることもしていなかった。

「競馬ですか？」

「あ、ああ」

「お休み中だったんですね。なら出直しますが……」

「いや、いいよ。とっとと済ませてしまおう」

「では、お言葉に甘えて」

かつかつと、彼女の足音が部屋に入ってくる。背丈は、ややすらりとした印象を覚えるくらい、百六十センチ強というところだろうが、その一完歩は不自然なくらいに大きい。足が長いのだ。

安和准教授は、彼女と携帯を同じくらいに気にしている。みっともないからスイッチを切つてしまいたいのか、やっぱりパドックが気になるのか、どっちかはわからない。どっちでもあるように見えた。

「あ、いえ、たいした用事ではありませんから、どうぞTVをごらんになってください」

「そうは言うがな……」

言う間に、彼女は准教授のところにとどり着いている。そして、ふいと携帯の画面を覗き込んだ。

「どの馬を買ってるんですか？」

「今回は買いに行く時間がなくて……」

「そうですね。お忙しそうですね」

「競馬は……見るのか？」

やるのか、とは聞かなかつたあたり、准教授もさすがに大学教員だった。勝ち馬投票券を未成年が購入することは禁じられている。

「いえ、全然。でも、馬は嫌いになれません……」

不自然な、それは物言いだった。それには准教授も気付いたのだろう。何も言わず、少し椅子を引いて、彼女から見やすい位置に携帯を置く。二人きり（ではないのだが、僕のことは無視するのが彼らの流儀だ）で、女学生、それもとびきり美しい女学生と、独身の教員の間の距離として、手元の携帯を覗き込ませる位置は、あまりに近すぎたのだ。

「ま、二十歳になったら一度、買ってみるといい。生活を破綻させない程度の娯楽としては、ギャンブルはいい。特に競馬は見ているだけでも心躍る」

「そうですね。……あ、この子走りそう」

「……？ 七番人気か。穴党だな」

「そんなじゃないですよ。他の子達よりもやる気だなんて思っただけです」

「……」

彼女がやる気だと言った馬に、他の馬と違った様子は特に見受けられなかった。パドックでの様子は、どちらかといえばおとなしく、闘志を感じさせないものだった。

彼女は適当なことを言っただけか、それとも何か根拠があるのか。

准教授は、前者と判断したらしい。明らかに、体から力が抜けた。

サボって競馬中継を見ていた彼を責めるでもなく、そして教員のサボりの現場に居合わせて気まずそうにするでもない実に自然な振る舞いに、恐らく彼は気圧されていたのだ。それが、人の気を引きたい若者らしい奇を衒っただけの予想を聞かされて、所詮は普通の女学生だと侮る気持ちになれたのだろう。

が、安和准教授は、もう一度、彼女を尊敬の眼差しで見ることになる。

大井競馬場第三レース、彼女が本命印を打った七

番人気二枠三番の青鹿毛馬は、馬群に包まれる不利を嫌って逃げを打った。どん、とスタートと同時に猛ダッシュ。先頭に立つと、かなり早いペースでレースを引つ張る。第四コーナーを立ち上がって、最後の直線。追いつがる後続——大外から一気に仕掛けた一番人気に一度は先頭を譲るものの、不屈の勝負根性を見せ付けて、ハナ差で差し返した。

「おお……」

「ふふふ」

「すごいな」

「ビギナーズラックです」

あくまで謙遜する彼女。それもまた、実に押し付けがましくない。

出来た少女だった。

「で、なんの用事だったっけ」

「ああ、そうでした。履修登録についてご相談が」

「ん？ おお」

彼女の用事は、自分の立てた履修計画に無理がな

いかどうかをチェックしてもらいたい、というものだった。まずもって、滅多にそんなことを言ってくる学生はいない。

そのやる気に、准教授はまたひとしきり感心したようだった。

「ふむふむ……」

彼女に渡された、時間割の書かれたノートを准教授がチェックしている待ち時間、ふと彼女は准教授の手元から視線を上げた。

彼女の目に映っていたのは、恐らく巨大な馬の化石の、その頭部だった。

それは、馬の化石ではない。だから、細部はよく見れば違うはずだ。だが、馬の骨格を知っている人間ならば、誰しもそれが馬の頭骨にそっくりであることを指摘するだろう。

概ね、正三角形を半分に切った直角三角形の形をしている。大きく分けて上下の二パーツから構成されていて、その二つのパーツは最先端部と根元半分

ほどで接しているが、前半分のほうにはスペースがある。

上のパーツには四箇所大きく凹んだ部分があるのだが、彼女の位置からは二箇所しか見えなかったろう。後方上部にならんだそれは、眼窩と外耳孔に酷似している。

ほぼ、馬の頭蓋骨の形だ。

ただし、その巨大さを除くのならば、だ。顔の長い人間に対する揶揄として、馬面、という言葉がある。それにしても巨大すぎる。化石だから平面的に潰れてしまっているが、もしそれを立体に復元しなおしたならば、重種馬よりも大きくなるのではなからうか。

頭頂高二十メートルの、巨大な馬型の頭部。それが彼女の前にあったはずのものだ。

「これがタシユンケ・ワイトコですか……」

「ああ。異界の世界の馬型ロボットだ。二十五年前に突如現れ、二十年前に大暴れしたデカブツさ。今

は化石だがね」

「不思議……。ロボットの化石ってどういうことなんだらうって思ってたんですけど、本当に化石なんですかね。フレームが岩盤に埋まって……」

「ああ。フレームも石化してる。本当に馬の化石みたいだろ」

「そうですね。……話には聞いていたけど、実物を見るとまた……不思議ですね。なんで異界の馬型ロボットが石になっちゃったのか……」

それは恐らく修辭疑問に近い言葉だったはずだ。

しかし、安和准教授はそれに律儀な説明で応じる。「化石、と言っているが、クリプトビオシスに近い現象だろうとは言われているな。クリプトビオシスってのは……クマムシなんかが有名な。生存に適さない環境下である種の生物が取る、体内の水分を極力少なくした、特殊な形態。」

二十数年前になんらかの原因で動き出したタシユンケ・ワイトコが、二十年前の大暴れの後、なんら

かの原因で活動水準を低下させた。その活動水準の低下した形態が、この化石だと言われている。動力を伝達するためのフレームだけになり、そしてそのフレームを平面的に折りたたみ、石のような材質に変えることでこちら側に存在するための力を節約しているのだろうか……とね。

……知ってたか？」

範子は、安和准教授の説明ににこと頷くだけ。驚いたような様子はなかった。

「あ、はい。長木蓉先生の『異界科学への招待』に詳しくだったので……」

少し、範子は気まずそう。しかしそれは安和准教授の側とて同じこと。ぼりぼりと頭を掻いて、話題を少しだけずらす。

「まあ、元ネタはアレの元になった論文……の元になった長木とのおしゃべりだよ」

「長木先生とは？」

「大学の同期だ。まあ、なんつうかすごい奴だった。

最年少の首府大准教授、それも一度も首府大から出なかつたんだからな」

「先生は結構あちこち行かれたんですね」

「まあな。や、長木みたいな例外中の例外以外はそんなもんだぞ。俺が特別にダメだったわけでは……いや、結局院に進んだの同期では俺とあいつだけだったから比べると……」

安和准教授は、話しながらひとりで落ち込んでいく。

だから、今度は範子が話題を変えてやる番だった。

「競馬、お好きなんですか？」

「ま、そうだな。ささやかな趣味って奴だ。仕事も馬で趣味も馬だよ」

と、タシユンケ・ウイトコを指し示す。

「うふふ」

と笑う範子は決してお愛想という感じでもなさそうだった。それが僕にはなぜかほんの少しだけ気になった。

だけど、僕の気持ちに頓着しないのは異界研のいつものやり方。安和准教授は調子に乗って言葉を続ける。

「どうだ、走りそうか？」

「うーん……」

彼女は言いよどむ。走るわけがない。それはただの残骸だ。二度と立ち上がることもなく、走ることもない。二十年前のあの日から。

彼女は、きつと真面目な人だ。だから、准教授のふざけた問いにも真剣に考える。真剣に考えれば、結論はひとつだ。走れない、走らない、走るはずがない。

「走りますよ」

だから。

だから彼女の答えは、意外だった。

彼女はその、勝ち馬を当てた不思議な眼力で、

それが走ると断言したのだ。

これが、僕と彼女の出会いだった。

僕は、以来、彼女の動向に耳を澄ますようになってきた。

まず、彼女の名前を知った。

貴志^{きし}範子。首府大理工学部の二年生。教養課程を終えて異界研に所属することになった。髪も瞳も真っ黒で艶やか。それがあまり重たくないのは、頭の小ささあればこそ、なんだろうか。ファッションは、落ち着いている。肌の露出はあまり好まないらしいが、パンツルックよりはスカートの日が多い。すんなりとスタイルがいいので、なんでも似合う。特に、足は長い。それから。それから――。

「保坂さん、見ました？ 範子ちゃん」

僕に重要な情報をもたらすことになる須葉恵一は、またも僕の寝ている部屋にやってきていた。話し相手は、保坂一人。部屋に入って渋谷がないことに

気付いた保坂が少し浮かない顔をしたのには、どうやら須葉は気付かなかつたらしい。

「ああ、あれか、すっげえ可愛いっつってた。多分見た」

「どっすか？ どっすかどっすか？」

「まあ、美人なんじゃないか？ だからと言って何があるわけでもないが……」

須葉のうっとうしいくらいの高ハイテンションに対し、あくまで保坂は冷めている。

「なんすか、ノリ悪いっすねー。すごい美人が来たんすよ？ ドキドキしませんか？」

「僕異界研じゃないから」

「でも一緒の講義とかあるじゃないっすかー。それに範子ちゃんそっちのゼミにも出てるって」

「ああ、そうだな」

「話したっすか？ 近くで見えたっすか？ 結構胸デカくないっすか？」

「……見事な下司^{げす}さだな……」

「そっすか？ これくらい普通じゃないっすか？」
 「ああ。普通でいいよ。君はそのまま普通でいてくれ。別に話してないぞ。近寄ってもいいし、胸もじろじろ見てない」

「なんでっすか？」

「話す理由がない。僕、今回はゼミリーダーでもなんでもないし」

「ダメっすよ。そんな消極的なことじゃ範子ちゃん、他の男に取られちゃいますよ？」

「最初から狙ってないって言ってるんだけどな」

「いやー、ダメっすよ、戦う前から諦めちゃ」

「……」

坂坂はすっかり辟易へきえきした様子だった。気持ちはよくわかる。須葉は、概ね人の話を聞かないで一方的にまくし立てる上に、その内容は基本的にくだらない。くだらない。くだらないが、結構胸デカイ、というのは聞き捨てならない情報ではあったのだ。だけど、彼女は体の線が出るような服を基本的に

は着てこない。横目では、立体感は掴みにくい。

だから、僕は春を恨んだ。

春を恨んで、夏を慕った。

夏になれば、少しは布地も薄くなるはずだ。

出会いの季節が過ぎて、次の季節になることばかりを、だから僕は考えていた。

だけど、出会いの季節はまだ終わってしまうつもりがなかったらしい。

その日、彼女は学生食堂で研究室の女性陣と昼食を共にしていた。

現場を僕は見たわけじゃない。ただ、会話の内容は聞いていた。聞こえていた。

彼女が食べていたのは、多分麺類。素うどんだろうか。つるつるという音が少しだけ聞こえた。彼女の名誉のために付け加えるのならば、それは十分小さな音ではあった。ただ、僕が耳を澄ませていただけだ。

「範子ちゃん、いつも素うどんだよね」

「そうですね。安いですし、おなかにたまりますし……」

「色気のない理由だね、また」

からからと笑ったのは、工藤鳩子くどうたねこの声だった。異界研の修士課程一年目だったか、彼女の先輩にあたる女学生だ。

がたとと音を立てて椅子を引くと、お盆はそっと置いたものの、それから勢い良く腰を下ろす。動作のいちいちがやかましい。僕の記憶するところに拠れば、髪もざっくりと短くて、いつもジーンズ穿はき見るからに活動的な女性なのだ。

「いただきます」

工藤の昼食も、恐らくは麺類だった。フォークが食器を打つ音からすると、スパゲッティ、それもナポリタンかミートソースか。これも、確かあまり値の張らないメニューだったはずだ。まあ、学生食堂で美食を気取ることもない。安くて、量があって、

よほど不味くない食事を求めればこそ、学食に彼女たちは赴おもむいたのだろうから。

「範子ちゃん、卒論でどうすんの？」

「卒論ですか……。やっぱり今から考えておいたほうがいいですか？」

「まあ、そりゃ早いに越したことはないけど……本格的には四年になつてから考えればいいんじゃないかな。全然なにも考えてない？」

「考えてないことはないですけど……。タシユンケ・ウイトコで何か書ければなあって」

「デカブツかー。まあそうだよねー。ウチの研究室の目玉だもんねー」

工藤の声は、あまり嬉しそうではない。タシユンケ・ウイトコを専門としていない彼女には、それは研究室の予算を大きく食うだけの邪魔者なのだ。

「資料もいっぱいあるし、研究の方向も見えやすいし……。ちよつと楽そうですよね」

口を挟んできたのは、木城慧きじょうけい。異界研の新人五

人のうちの一人、もう一人の女性だ。

「それはどうか。先行研究がいっぱいあるってことは押さえなくちゃいけない内容がいっぱいあるってことでさ。誰もやってないところのほうが論文書きやすいかもよ」

「そうなんですか？」

「うん。だから範子ちゃんも今からそんなせこましいこと言っていないで、色々やってみようよ。異界学はねえ、デカブツ以外も色々あるよ」

「そうですね」

怠け者扱いされて、彼女の口調は少しだけ急ぎ立てられたよう。その速さが何を意味するのか、僕にはこのときまだわからなかった。

その日の講義が全て終わったあと、彼女が僕のいる部屋に顔を出したのは、いったいどうしてだったのだろうか。

そのとき、部屋には僕しかいなかった。

考えてみれば、彼女と二人きりになるのは、初めてだ。

僕は、緊張する。

何もあるはずないとわかっているのに緊張する。電気もつけず、彼女は部屋の中に入ってくる。

「誰もいませんか……？」

そっと、声をかける。彼女が部屋に入ってきた理由は、恐らく電気が消えているのにドアが薄く開いていたから。それは、安和准教授がこの部屋で競馬中継を見ようとして鍵を開けたところで通りかかった学生に声をかけられてしまったからに他ならない。間抜けな話だし、無用心な話でもある。

が、僕は彼の不注意に感謝すべきなんだろう。

おかげで、僕と彼女は、薄暗い部屋で二人きりになれたのだから。

でも、僕には何もできない。何も言えない。

僕をじっと見据える彼女の視線に、僕は思わず身をすくめる。

「!？」

その拍子に、大地が揺れた。部屋に置かれた計器類がはげしく動き始める。

「君………いったい………」

呆然と、彼女はつぶやく。長い足をぐつと踏ん張って、なんとか転ぶのは避けたようだった。

よかった、と思う。彼女が怪我をしなくてよかった。

「今の、君………なの………？」

彼女は僕を見つめる。その瞳の色をなんと呼べばいいのか。疑念？ 驚嘆？ 恐怖？

わからない。わからないということが、無性に不安だった。胸をかきむしられるような、それは二十年前ぶりの気持ちだった。

「驚くことはない。君は彼の初恋の人にそっくりだからね」

突然の声に、彼女が開きっぱなしだったドアを振り返る。

逆光で、そこに立っている人間の顔は良く見えな

い。だけど、その声は、僕にはとても懐かしかった。

「あの……失礼ですが、あなたは……？」

彼女が、範子が疑問の声を上げる。無理もない。その怪物がこの研究室に顔を出したのは、十年ぶりだったからだ。僕には懐かしくても、範子にとっては、見ず知らず。僕の間と彼女の時間は違う。そんな当たり前のことを、しかし僕は少し切なく思う。

「ふむ。最近の学生は自分が使っている教科書もろくすっぽ知らない見える」

「は、はあ……？」

「何故現代の若者は教科書に載っている写真に落書きをしないのか。わかるかね、親友」

あいも変わらずぬ馴れ馴れしさでそいつは僕に話しかけてくる。十年の間一言の沙汰もなく、親友も何もないもんだ。だから、僕はそいつに無視を決め込

む。

「やれやれ、王子様はだんまりか」

芝居がかった仕草でそいつは大げさに肩をすくめて見せる。何歳になったのだろうか。初めて出会ってから二十年以上になるはずなのに、不思議と老け込まない女だった。

「あ……！」

そして、範子はやっと気がついたらしい。目の前にいる女の顔を教科書の裏見返して見ていたことを。

「『異界科学基礎』の長木先生ですよ！ あと、あと『異界科学への招待』とか！ それからそれから……」

「ふむ……どう思う、親友。最近の学生は教科書の著者近影まで見ているらしい。糞真面目なことだとは思わないかね」

「え、ええと……」

範子はすっかり困り顔だ。長木の人を食った態度は二十年前から変わらない。懐かしくはあるが、範

子がからかわれているのを見ていい気持ちはしない。

「ふむ。正解だ。全国百以上の大学で教科書として使われている『異界科学基礎』の著者であり、初掲載の論文で雑誌のインパクトファクターを十五も上げた異界科学の第一人者にして美少女天才科学者長木蓉とは私のことだ」

「でも、十年前に失踪されたと聞いてましたが……」

美少女には触れてやらない、彼女は親切か、あるいはノリが悪かった。

しかし。

しかし、確かに長木は四十代には見えなかった。美少女は言い過ぎにしろ、初めて出会った二十数年前からあまり変わらないような気がする。彼女は安和准教授の同期だったのだ。それはちょっと信じられない。範子と並んでも、あまり年が変わらないように見ええる。背が低く手足が短いだけ子供っぽいかもしれないくらいだ。

一体、彼女はどんなアンチエイジングの秘法を使ったのか。それは、当然に範子にとって気にならないではないことだと僕は思った。しかし、範子にとって、その質問は初っ端に繰り出すには礼を失しているように思えたのだろう。ただ、長木の十年間の不在についてだけ問う。

「主観的にはいつでも踪を追えたがね。ふむ、しかし私の動向まで気にしているとは、さては真面目学生だな」

「いけませんか」

さすがに、範子の声も少し怒ったようには聞こえた。

「いけなくはない。が、真面目かどうかは優秀かどうかと得てして関係がないものでね。真面目だが不出来な学生は我々教員にとっては中々に面倒くさく、そして実りが無い」

「……」

範子は何も言わない。長木に挑発の意図があるの

は、もはや明らかだ。だが、それに簡単に乗るような女では、範子はないのだ。

「ふふん。不満なようだ。では、少しテストをしてやろう。このテストをクリアできたならば安和君の講義の単位程度ならばどうとでもなると保証しよう」

「はあ」

「なんだ、それじゃあ不服か？」

「はい」

「じゃあ、何が欲しい？」

「……しゅ……」

「しゅ？」

謝罪を、というあたりが彼女が恐らく最初に言うとしたことだったのだろう。範子は怒っていた。完全に後ろ足に体重が乗っていた。その気になれば即座に長木の頭（身長差が随分あるのに範子とさしてサイズが変わらない）を打ち抜ける体勢に入っていた。

しかし、結局は長木に蹴りを入れること、学内で暴力事件を起こすことを諦めたらしい。

後ろ体重のまま、作り笑顔で、彼女は言った。

「お肌、お綺麗ですね」

「? お、おう」

長木は、あまり容姿をほめられることになれてはいない女だった。それは、二十年前から変わらない。

「ケアの方法を教えてください、というのでどうですか?」

見事に美しい、二十歳の作り笑顔。すっぴんを見ただけではないけれど、多分まだそんなにはスキンケアの必要などないはずだ。

そんな彼女が、あえて美容術を問う。中々にそれは強烈な皮肉だった。

「ふん。いいだろう。そいつを聞いてしまったら君はいよいよ自らの優秀さを証明しつづけねばならなくなるのだがな」

「は、はあ」

「ではそろそろ行くぞ。まず、異界とはなんだ?」

「それ自体としては不明です。エネルギー保存則の破れ目の向こう側、と長木先生はお書きになりましたが、少し詩的に過ぎるかと思えます」

「エネルギー保存則の破れ目とは」

「二十一世紀初頭に発見された、エネルギー収支が明らかにおかしいいくつかの現象のことです。その最も代表的なものは、完全恒温性素材、異界物質です。どのような処理を加えても表面温度を変化させることができない物質」

「それはどこで発見された?」

「ある朝、首府大理工学部の裏手に鎮座していました。このタシュンケ・ウイトコと称される巨大物体を中心に、様々な形状、様々な大きさの異界物質が散乱していました」

「ああ、そうだ。当初それは実に手の込んだいたずらだと考えられた。首府大もこういうユーモアのセンスのある学生が出てきたのか、東海岸にやっと追

いついた、などという論評さえあった。馬鹿馬鹿しい話だ。

さて、そのいたずらで設置されたと思われていたこのタシュンケ・ウイトコがそんな大層なものだと判明した経緯は?」

「物性化学の学生数名がそのいたずらに用いられた見たことのない物質に興味を示し、実験の合間に戯れに試料分析にかけたところ、異常な値を記録しました。彼らはそれを教員に報告。そこから話が広がりました」

「話を聞いて最初に乗り込んできた軍事メーカーの社員の名前は?」

「……」

「どうした?」

「すみません。存じ上げません」

「まあそれはそうだろう。私も忘れた。別件で首府大に来ていた営業担当者だな。そいつの紹介で軍学産共同での異界の調査が始まったんだが、その営業

マンはそれを自分の後輩に任せだし、後輩ってのも現場にはまったく関わってこなかった」

「はあ……?」

「ま、その後輩の営業が連れてきた研究班の班長のインタビューには二人とも名前が出ていたはずだ。トリビアルな話をする奴だなと思い、読んだ二分後には名前を忘れた」

「は、はあ」

「ちなみにこのインタビューは初学会発表の前には必ず読まされる。この班長どのはいまだに顔を出しては『私のインタビューは読んだかね』とやっついてくからだ。コピーは研究室のどこかに転がっていたはずだが、さて」

「そんなに大切な文献なんですか?」

「まあ、歴史のお勉強としては意味がないとは言わん。が、科学史をやるのでなければ私の本に書いてある程度の認識があればそれで十分……。読んでいないと班長どのが不機嫌になって学会の円滑な進行

が損なわれるのだが、まあ学会発表の前の晩にでもささっと読んでしまえばいい。

さて、軍学産共同の研究チームが発見した異界物質の出現法則とはなんだった？

「人の心です。個々人の心の形にあった物体が引き出されます」

異界科学と呼ばれる分野が特殊な、しかも独立した一分野として伸張した最大の理由が、この人の心と関係するという異界物質の特異性だった。異界科学は、物理学や化学だけでなく、心理学や哲学、果ては文学の知見まで動員して組み立てられつつある体系なのである。

「異界物質の出現を見たことは？」

「ないです」

「異界物質は往々にしてどのような形状を取る？」

「その多くは武器です。特に冷器。火器が出現した例は三例。うち一例が……」

と、範子は長木の顔を見る。

「そのとおり。私だ」

くるくると、ガンアクションでもするように長木が指を回す。指を回すスピードはどんどんあがっていき、人間の目では追いきれないくらいになったところで長木は指を止めた。

ぴたり、と止められた長木の指には、まるで最初からそこにあつたかのように、一丁の拳銃がぶら下がっていた。

「！」

範子が息を呑む。異界物質の出現をはじめて目のま

当たりにしたのだ。無理もない。

「異界物質を引っ張り出す方法はいろいろだ。私の場合はこのエアガンスピンド。エアでやっているうちにいつの間にか、というのはよく見られるパターンだ。覚えておくといい」

「はい！」

範子は目を輝かせて、さっきまでの怒りを忘れたかのように。素直といえば聞こえがいいが、ちよつと

騙されやすいようにも見えて、僕は少し心配になった。

「このように異界物質を出現させる行為をなんという？」

「ええと……此岸化しがんですか？」

「そうだ。私はそんな気取った言い方をしないでよよかろうと思うのだが、そういうのが好きな連中はいてね。この現実をロボットアニメかなにかと勘違いしているんだ。まったく、無邪気なお子様だよ、男というのはね」

「そりゃ俺のことか？」

戸口から声をかけたのは、少し息の上がった様子の安和准教授だった。呆れたような疲れたような、いわく言いがたい顔をしている。僕の知る限りにおいては、彼と長木もまた、十年ぶりのはずだった。

「おや。誰かと思えば安和君じゃないか。久しぶり」「久しぶり……じゃないだろうが。今までいったいどこへ行っていた？ なんでここへ来た？ 純真な

新人に何を吹き込んだ？」

息を整え終わつたらしく、のしのしと室内に入ってくる。驚いた風もなく、ただ苛立ちだけをあらわにしている。それがただのポーズなのか、それとも本心なのか、僕にはわからなかった。

「まったく。君はいつも私に聞いてばかりだ。履修登録は済ませたか、レポートの締め切りは把握しているか、こんな遅くに徒歩で帰って大丈夫か……」さぞや迷惑ばかりかけられたかのように、長木。しかしこれは……。

「安和先生って昔から面倒見のいいタイプでらしたんですね……」

ということだ。学問的には天才だが、生活習慣がだらしないにもほどがある長木の面倒を、安和准教授はずっと見てきたのだ。

「まったく。そうだよ。俺はずっと昔っからこいつのお世話係だよ」

「ははは。私のサジェスションで学位論文を書いて

おいてよく言う。それで、いったいなんの用だね？
お世話係の超自然的な能力でご主人様の居場所でも
嗅ぎつけたか？」

「いや、鍵をかけたので戻ってきただけだ」

「そいつはなんとも散文的だな。どうしてこう……
もつとロマンティックな言葉がかけられないんだ。

そんなだからまだ独身……独身だよな？」

「そうだよ。おかげさまでな。」

貴志、何を言われたのかは知らんがこいつの吹き
込む言葉はよく検討してから受け止めるよ」

「は、はあ……」

「締め切りの近い論文のネタは絶対に話すな。その
ままパクられる……かどうかはネタ次第だが、発展
させる方向はまあまず全部先回りされると思え。そ
れで締め切り直前に実験をやり直しはじめて結局落
とした奴は一桁じゃきかない。そこまでいなくなると
もこんなもんじゃだめだと思ひ込むのはほぼ八割」

「それは……」

「お前もだろうが」

「えー……」

「なんだ、心底いやそうな顔をして。もつと純情な
反応が来るものと思っていたが」

「俺も四十四だ。そんなに初心^{初心}ではいられんよ」

「そうか……。君はもう四十四歳になってしまっ
たか」

「お前もだろうが」

「ふつ。それが君の悪いところだ。君は私ほどでは
ないにしろそこそ優秀な研究者だが、研究者の根
本的な資質の部分でやはり僅^{わず}かに及ばない」

「そうか」

「つまらない反応だな。なんだ、研究者の根本的な
資質とは何か、聞きたくはないのかね。貴志君、君
はどうだ？」

「あ、聞きたいです」

彼女は素直だった。異界物質の現出という手妻^{てづま}で、
すっかり長木を尊敬の目で見ている。これも多分、

「いいことじゃないか。科学の発展と個々の科学者
のキャリア設計は時としてコンフリクトすることも
ある。悲劇だが、止むを得ざる犠牲だ」

「見所のある研究者の卵を次々潰しておいて言っ
ていい言葉じゃないな。まあ、とにかく、こいつはヤ
バイ奴だということだ」

「くくく。潰れるのは弱いからだ。君は潰れないで、
首府大の准教授にまで上り詰めたじゃないか」

「確かに学恩はある……。まあそれはいい。とかく、
久しぶりに顔を出したんだ。馬場^{ばば}先生にも挨拶して
ないだろ。お前が失踪したときあの人も随分……」

「ははは。迷惑をかけたからごめんなさいをしると
そういうのか。ははは。これは傑作だ」

「あー、お前が人に頭を下げるのが得意なタイプじ
やないことは知ってるがな。しかし、キャリアに大
穴開けて、そして出来ることも研究だけというお前
がまともな道に復したいならそういう礼儀は……」

「ふつ。そいつはごめん蒙^{こうむ}るね。なんだ、飯を食う

愛すべき性質であるのだろう。

「ふふふ。いいね、素直な若者は。」

では聞かせよう。研究者の根本的な資質とは、自
らの先入^{せんいゆげん}見を疑い続ける胆力だよ。この部分にお
いて、安和君は私を上回ったことがない」

それはもうたつぷりともったいをつけた長木の言
葉に、しかし範子も安和准教授も特に感銘を受けた
りはしなかったようだった。

「……」

「……」

「どうした？」

すっかり拍子抜けという範子と安和准教授の反応
に、長木のほうも拍子抜けしたらしい。聞き返す声
には微妙に力がなかった。

「あ、いえ、なるほどなあと」

「なるほどとは思ったが、そんなにもつたいつける
ような話か？」

「ふふん。それが先入見に囚われた判断というのだ

よ。確かに常識的な話ではあるが、反常識だけが真実だというのも典型的な先入見に囚われた判断というものだ。常識が正しいこともある。正しくないこともある。すべては、実験してからだ」

「なるほど……」

「物は言いようだな」

「そうして真に先入見から自由になれば、こんな事態だって受け入れられる」

パチン、と長木が指を鳴らす。

次の瞬間、突風が吹いた。

室内の一点を中心に、全方向へ吹き付ける風。爆風のように、一切の熱量を伴わない。巨大すぎる異界兵装が現出するとき、このような現象が起こる。

何かはわからない、が、三人に危険が迫っている。だから、僕は、彼女たちを庇かばおうと体を投げ出す。さっきまで化石だった僕の体は、なんとか動いて

くれた。